

## 抄 録

## 第14回群馬がん看護フォーラム

日 時：2018 年 5 月 26 日（土） 13：00～17：00

会 場：群馬県立県民健康科学大学

主 催：群馬がん看護研究会、中外製薬株式会社

理事長：神田 清子（群馬大院・保・看護学）

## メインテーマ：Let's try がんをめぐる倫理的問題

## 《特別講演Ⅰ》

座長：神田 清子（群馬大院・保・看護学）

『がん医療に携わる看護師の倫理的感性を高め、話し合える現場を創る』

濱口 恵子

（がん研究会有明病院 副看護部長 /

緩和ケアセンター GM がん看護専門看護師）

がん治療は治癒・生存期間の延長・QOL の維持向上をめざす治療とはいえ、失声や末梢神経障害などの様々な機能障害、ボディイメージやセルフイメージの変容、妊孕性の問題など、患者の生活に変化を伴うことが多い。しかもエビデンスは確率論であるため、治療効果がその患者にあらわれるとは限らない（医療の不確実性）。

そこで患者の価値観が多様化する中で、「患者が納得できる最善とは何か」を患者と多職種チームが対話しながら考え、倫理的配慮がなされることが求められる。

倫理原則は、与益（善行）、無危害、自律尊重、正義の4つがあるが、臨床現場ではこれらの原則同士が葛藤しているため、どのようにバランスをとるのかという倫理的ジレンマに遭遇する。そのため、患者—家族—医療者間で十分に話し合い、個別的に包括的に判断すること、つまり、倫理的配慮をするためには話し合える現場を創ることが不可欠である。

がん医療は外来に移行しているため、いかに外来—病棟—多部門が連携し、初診時から患者の個別性を大切に倫理的配慮に基づいた医療・ケアを行うかが課題である。がん研究会有明病院での取り組みを紹介し、看護師が多職種チームの中で役割と責任を果たすこと、細やかな生活援助に加えてがん治療看護や緩和ケアを駆使していくこと、これらそのものが倫理的配慮につながることを改めて考えたい。

## 《特別講演Ⅱ》

座長：清水 裕子（群馬県立県民健康科学大学 准教授）

『ボランティアとしての医療関係をめぐる活動をする上での倫理的配慮』

土屋 徳昭（群馬ホスピスケア研究会 代表

ぴあサボぐんま 代表理事）

ボランティアが医療にかかわる機会の増加は、これからの社会環境、医療・介護環境を俯瞰してみると明らかです。国は、地域包括ケアシステムを打ち出し、がんに限らず、すべての疾患において、地域が患者を支えるという方向にシフトしようとしています。この事はとりもなおさず、生活支援、介護予防に地域住民＝素人＝他人＝ボランティア（老人クラブ・自治会・NPO 含む）の支えが重要となります。そこに、医療、介護専門職（医師、看護師、介護士、薬剤師、各種療法士、栄養士など）、行政（社会福祉士、保健師など）など多分野多職種が関わることはもちろんです。

約30年、「ホスピスケア」という看板で、医療に関連してボランティアの立場で活動してきた経験から一つの問題を提起したいと思います。「ボランティアが問題を起こしたら誰が責任を取るの？」という議論から、「どうしたらボランティアと共働できるか？」についてみんなで考えましょう。今、まさにこのような時機にあるのではないのでしょうか。